

郡 教 セ	G02 - 04
	平 28. 261 集
	地理歴史

# 歴史的事象を根拠に基づいて考察し、 時代の特徴を表現できる力の育成

—資料の読み取りと発表活動を通して—

特別研修員 反町 豊

## I 研究テーマ設定の理由

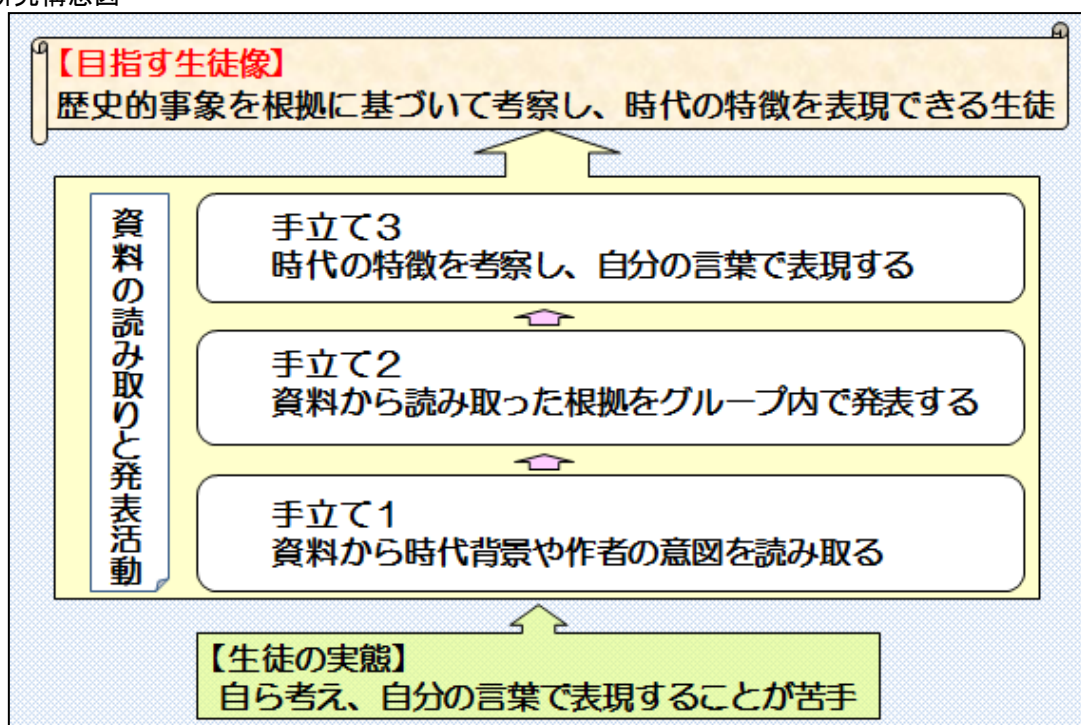
群馬県「県立学校教育指導の重点」IV高等学校等における教科等の指導の充実（地理歴史の目標）では、身に付けさせたい力として「世界史、日本史においては、歴史的諸事象を多面的・多角的にとらえ、その形成や展開の過程の実証的な考察を通して、歴史的な思考力を育成する」ことを挙げている。また、指導上の配慮として「地図や年表その他の資料を活用し考察させることや、調査・研究したことを発表させるなどの主体的な学習活動を通して、諸事象を公正に判断することができるように指導する」ことを重視している。

さらに平成 28 年 2 月の高大接続システム改革会議で、地理歴史（世界史）において重視すべき学習のプロセスと評価すべき具体的な能力として「歴史資料を読みとき、歴史に関する重要な情報を取り出す力」、「資料（文字資料・絵画・写真・歴史地図）と歴史上の事象との関わりを推論する力」、「資料等の根拠に基づいて、論理的に表現する力」などが挙げられており、資料の読み取りと発表活動が重要となっていると考えられる。

本校では大多数の生徒が大学進学を希望しており、大学受験に必要な知識を得ることを重視しているのが現状である。資料の読み取りや資料を基に思考すること、さらには自分の考えを表現することには課題があると考えている。そこで、まず自分が考えたことに対して自信を持たせることが必要であり、そのためには、ただ歴史用語を暗記させるのではなく、歴史的な事象を根拠に基づいて考察し、自分の言葉で表現する力が大切であると考え。さらに、考えたことを他者と共有し、共通点や相違点を認識することにより、自らの考えを深めるとともに再構築する経験が必要であると考え、上記研究テーマを設定した。

## II 研究内容

### 1 研究構想図



## 2 授業改善に向けた手立て

歴史的な事象を根拠に基づいて考察し、時代の特徴を表現させるための「資料の読み取りと発表活動」として、以下の三つの手立てを設定した。

手立て1

資料から時代背景や作者の意図を読み取る。

手立て2

資料から読み取った根拠をグループ内で発表する。

手立て3

時代の特徴を考察し、自分の言葉で表現する。

手立て1は、資料（絵画・ポスター・新聞記事・文学作品など）から、歴史的な事象の根拠を読み取る活動である。ここで重要視したのは、これらの作品の作者の意図を読み取ることである。例えば国家や権力者によって意図的につくられた資料として、第一次世界大戦における総力戦を学習する際に、大戦中にヨーロッパ各国で作成されたプロパガンダポスターを使用したり、世界恐慌後のアメリカにおけるニューディールを学習する際に、ニューディールを批判するアメリカ国内外の風刺画などを使用する。このように、資料は作品及び作者の意図を踏まえて、「このような時代だったから、作者はこのようなことを伝えようとした」ということを考察できるようなものを用意した。

手立て2は、生徒一人一人が資料から読み取ったことを少人数のグループで互いに発表し合うことで、他者の考えとの共通点や相違点に気付く活動である。共通点を見付けることは自分の考えに自信を持つことにつながり、他者との相違点は自分の考えを再構築する際の材料となる。

手立て3は、手立て1、手立て2の活動を基に時代の特徴をまとめたり、今後の変化を推論したりする活動である。ここでは、自らが考えたことに、他者の考えを加え、根拠に基づいた考察をすることが重要となる。

以上の手立てを通して、自らの考えを明確にし、また、他者の考えを活用して、時代の特徴を表現できる力を育成したいと考えた。

## Ⅲ 研究のまとめ

### 1 成果

- 手立て1～3の段階を踏むことにより、自分で考え、他者と共有し、自分の考えを深めるという流れができた。特に考えを他者と共有する活動は、自分の考えに自信を持つことにつながる事が分かった。全体での発表より、まずは少数のグループ内での発表の方が本校の生徒の実態と合っており、発表しやすい環境を整えることも重要であることが分かった。
- 難解だと思われる資料を提示しても、時代背景の理解が十分にできていれば読み取ることができた。資料の選択や提示の仕方も大事ではあるが、時代背景の理解も重要であることが分かった。逆に、この部分の理解が不十分であると、作者の意図が十分に読み取れないことが分かった。時代背景を十分に理解させること、つまり根拠を明確に示すことが、その後の思考を左右することになる。

### 2 課題

- 生徒の中には資料を活用して自分の考えを導き出すことができず、初めから他者の考えに頼ろうとする者もいた。知識を前提に資料活用する場面と、資料の読み取りから知識へとつなげていく場面を明確にし、まずは個人で考える習慣を身に付けさせるべきである。
- 生徒がグループでの話し合いに目的意識を持つことが必要である。少人数で話し合う意図、全体に向けて発表する意図を明確にし、有効な協働学習の形態を場面ごとに使い分けていくべきである。
- 論理的に思考して答えを導き出す場面と、自由に考えを出す場面を設定して、多様な思考を促す必要がある。

## 実践例

### 1 単元名 「民族運動の高まり」（第1学年・2学期）

#### 2 本単元について

本単元は、第一次世界大戦後のアジア各地で起きた民族運動について、その展開や原因・影響を理解させることを目標としている。19世紀までに産業革命を実現した欧米列強は、海外市場・原料供給地を求め、アジア・アフリカを植民地化した。第一次世界大戦中、列強は植民地となったアジア諸国に対し、戦後の自治・独立を約束して、大量の人員・物資を動員させた。しかし、戦後、民族自決の原理が広まる一方で、植民地の独立は無視されたため、アジア各地で民族運動が高揚した。大戦中に成長した民族資本や知識人などが、民衆を巻き込んで政治運動に参加していった。本時は、中国における新文化運動について扱う。辛亥革命後の袁世凱による独裁政治、大戦中の日本による二十一か条の要求という背景の中で、中国の知識人たちは新文化運動で何を伝えたかったのかを考えることがねらいである。特に魯迅という人物の人生や作品を通して、時代背景や社会状況を踏まえ、新文化運動の目的や意義を考察させたいと考えた。この後、中国史は五・四運動、中国国民党・中国共産党の結成へとつながり、激動の時代を迎える。後の中国に与えた影響を理解する上で、本時の学習が活かせるような内容にした。

以上のような考えから、本単元では以下のような指導計画を構想し実践した。

目標	第一次世界大戦後のアジアにおける民族運動の展開について理解し、その原因について考察する。また、アジアにおける動きがその後の国際社会に与えた影響について考察する。	
評価 規 準	関心・意欲・態度	第一次世界大戦後のアジアにおける民族運動の原因・経過・影響に関心を持ち、理解しようとしている。
	思考・判断・表現	第一次世界大戦後のアジアにおける民族運動の原因・経過・影響について、他者の考えも参考にしながら自らの考えをまとめ、表現している。
	資料活用・技能	第一次世界大戦後のアジアにおける民族運動の原因・経過・影響について、資料や事象を比較・関連付けて考えている。
	知識・理解	第一次世界大戦後のアジアにおける民族運動に関する歴史的な事象やその背景を理解している。
過程	時間	主な学習活動
課題 把握	第1時	・第一次世界大戦後のアジア各地で民族運動が起きた背景を理解する。 ・西アジアにおける民族運動の原因と現在の国際社会への影響を考察する。
	第2時	・インドにおける民族運動の原因を理解する。 ・ガンディーの非暴力・不服従運動の目的を考察する。
課題 追究	第3 ～6時	・1910年代の中国における新文化運動の目的を考察する。 ・五・四運動の意義と、その後の中国史に与えた影響を理解する。 ・中国における国民革命の展開について理解する。 ・日本の中国侵略と中国の対応について理解する。
	まとめ	第7時

#### 3 本時及び具体化した手立てについて

本時は全6時間計画の第3時に当たる。前時までに西アジア、インドにおける民族運動について学習してきた。戦後のパレスチナやインドでは、第一次世界大戦中の自治・独立をめぐる約束が戦後の民族運動や民族対立に影響を与えていた。中国では、国際的には第一次世界大戦中に日本から出された二十一か条の要求を受け入れるという屈辱的な状況とともに、袁世凱による独裁政治が進められているという国内の状況があった。このような中で、知識人を中心に新文化運動が展開した。この新文化運動は、この後の中国で起きる五・四運動、国民革命の展開を理解する上で非常に重要な位置付けとなる。そこで、本時では魯迅の作品を題材にした資料の読み取りと発表活動を通して、時代背景を踏まえて新文化運動の目的を考

察させる活動を行う。以上の観点から、手立てを具体化した。

手立て1

魯迅の作品（①『呐喊』（とつかん）「自序」、②『狂人日記』）から、作者の意図を時代背景と結びつけながら読み取る。

手立て2

個人で考えた結果を、少数のグループで発表し合い、共通点や相違点を確認する。

手立て3

発表を参考にして、新文化運動の特徴について考察し、自分の言葉で表現する。

#### 4 授業の実際

上記の手立てを実施するため、以下の資料を使用した。

①魯迅『呐喊』「自序」から、魯迅が文学を志したきっかけを読み取る。

②魯迅『狂人日記』から、魯迅がこの作品で伝えようとしたことを読み取る。

本時は、これらの資料の読み取りを通して、新文化運動の目的を考察し、自分の言葉で表現することをねらいとしている。

(1) 手立て1 魯迅の作品から、作者の意図を時代背景と結びつけながら読み取る。

①魯迅『呐喊』「自序」から、魯迅が文学を志したきっかけを読み取る。

作品を読んだ上でワークシートの質問に答えさせた（図1）。資料から抜き出すのみの質問には多くの生徒が取り組んでいた。（1）②④については、生徒Aの解答以外に、「屈辱的」、「危機的」などの解答があり、多様な考えを導き出した。また、背景として日本による二十一か条の要求を中国が受け入れていたことについては、ほとんどの生徒が把握できていた。

(1) 魯迅が文学の道を進むようになったきっかけは何か？

①一人の中国人が(日本軍に首を切られて見せしめになる)ところを、  
大勢の中国人が(気の抜けたような顔)で見物していた映像を見て危機感を持ったこと。

②下線部を言いかえると・・・

④(隷属的)な状況を受け入れてしまっている中国人

↓

⑤日本による(二十一か条の要求)を受け入れてしまった中国

(2) 魯迅は文学の力で何をしたかったのか？

(中国人の精神を良い方に改革すること)

図1 生徒Aの記述 ( )内が生徒の記述

②魯迅『狂人日記』から、魯迅がこの作品で伝えようとしたことを読み取る。

以下のワークシートを使用し、孔子の『論語』から、儒教思想について理解させた（図2）。その上で『狂人日記』を読み取らせた。ほぼ全ての生徒が図3に示すような記述をしており、時代背景を踏まえた上で、魯迅がこの作品で伝えたかったことを読み取れていた。

(1) 儒教思想とは

①子曰、父母之年、不可不知也。  
一則以喜、一則以懼。（『論語』より）

②(親を大切に作る心)を持っている人間は、  
上司にさからったりしないであろう。  
上司にさからわない人間なら、集団の秩序を  
乱すこともない。（帝国書院『パストリー』より）

図2 生徒Aの記述 ( )内が生徒の記述

(2) 儒教思想について書かれている部分に線を引こう。

①魯迅は儒教思想を(批判)した。

②下線部を言いかえると・・・

●(古い)制度

↓

●(袁世凱)による専制政治

図3 生徒Aの記述 ( )内が生徒の記述

(2) 手立て2 個人で考えた結果を、少数のグループで発表し合い、共通点や相違点を確認する。

手立て1の①・②の活動で考えた結果を、グループ内で発表させた(図4)。発表しながら考えを深めたり、修正することにより、手立て3で自らの考えをまとめる際の材料とすることが目的である。発表というよりは、話し合い、教え合いに近い形となったが、多くの生徒が意見交換する場となった。考えの共通点や相違点を見付けることにより、自分の考えを深めたり、再構築することにつながられた。また、この活動により、多様な考えに触れる中で、自分の考えに自信を持つようになると考えている。



図4 少人数のグループによる活動の様子

(3) 手立て3 発表を参考にして、新文化運動の特徴について考察し、自分の言葉で表現する。

手立て2の発表活動を参考にして、魯迅が新文化運動を通して伝えたかったことを、自分の言葉で表現させた。手立て1で①・②の資料を読み取り、手立て2で発表活動をすることにより、自分の考えと他者の考えを比較することができ、考えを深めることができた(図5)。

**他国の言いなりになっている中国を変えなくてはならない。そのためには、中国人の精神の改革が必要だ。儒教思想を批判し、古い体制を変えなくてはならない。**

図5 生徒Aの記述

なお、図5以外にも、以下のような記述があった(図6)。

**中国人の考え方、古い体制を変えなくては、植民地にされてしまう。**

図6 生徒Bの記述

しかし、儒教思想について十分に理解させられなかったことが影響して、以下のような記述をしている生徒もいた(図7)。

**親のために子どもが犠牲になっている。子どもの権利を守ろう。**

図7 生徒Cの記述

## 5 考察

手立て1～3の段階を踏むことにより、新文化運動の特徴を根拠を明確にして、自分の言葉で表現することができた。難解だと思われる資料でも、時代背景を理解し、作者の意図が読み取れれば理解することができた。また、自分の考えを全体の場で発表させる活動では積極的になれなかった生徒も、手立て2において、少人数のグループでの発表では、自分の考えを表現できていた。また、他者の考えを聞くことは、多様な考えを受容し、自分の考えに自信を持ち、考えを再構築することにつながっていた。このことから、手立て1～3の取り組みには効果があると考えられる。

一方で、初めから他者の考えを頼ろうとし、自分で考える活動に積極的ではない生徒も見られた。まずは個人で考えることを習慣付けると共に、自由な考えを導き出せる資料を提示することも必要である。また、資料の読み方や視点なども指導していくことが必要である。

歴史的な事象を考える上で、根拠をいかに明確にできるかが大切であることが分かった。根拠となる事実の理解が不十分であると、考えも不十分になり、自信を持って表現することができなくなってしまう。歴史的な事象を正確に理解させる活動と、自ら考え表現する活動を両立していくことが必要である。

また、発表の形態にも意図を持たせる必要があることも分かった。今後は全体の場での発表も、段階的に取り入れていきたいと考えている。